

海外研修員紹介

管理部企画課

今回は、日本障害者リハビリテーション協会からの依頼により、当センター学院手話通訳学科で研修を行ったミャンマーのイー・ティンザー・トゥンさんを紹介します。

イーさんはダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業の研修員として来日し、約10ヶ月間、日本のろう教育や手話通訳について勉強しています。本事業は、アジア太平洋で地域社会のリーダーを志す若い世代の障害をもつ人々が、各人のテーマに沿った研修を行うものです。研修員はまず日本語または日本手話を勉強してから、個別の研修テーマに取り組む仕組みなので、通訳無しで研修先の人々とコミュニケーションをとることができます。イーさんは手話通訳の養成について5月に1週間、当センター学院手話通訳学科で授業に参加して研修しました。最初にご本人の自己紹介、続いて研修での指導を担当した小藪江教官からのコメントをご紹介します。

【研修員自己紹介】

私は、日本に来る前の5年間、ろう学校の幼稚部の先生（ボランティア）をしていました。また、公文のスタッフとしても働いていて、聞こえる子ども

たちが解いた算数のプリントを添削していました。ろう学校の先生から、ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業のことを教えてもらいました。日本に行って、色々な事を学ぶと良いと言われました。日本に行くのが怖いと思ったけれど、勉強をしたいと思い応募しました。私が日本で学びたいと考えていたのは、ろう教育とろう当事者団体の活動です。実際に日本に来て、青年部の組織についても興味を持ちました。

国では、ろう学校が夏休みに入り、仕事が暇になると、校舎を利用して手話を教えることがありました。その経験から、手話指導にも大変興味がありました。手話通訳学科では、5日間研修をしました。指導教官である小藪江先生は真摯に学生に向き合い、指導をしておられました。その姿に感銘を受けました。

現在、ミャンマーでは、JICAプロジェクトの一環として手話指導や手話通訳者の養成が行われています。私もボランティアという形でお手伝いしたいです。将来の夢は、ろう学校の幼稚部の先生になることです。

【研修指導担当コメント】

5日間という短い研修期間で、自身の目標である手話教授法の習得に向けて、国リハ手話通訳学科のシラバスや指導方法からその知識を深めることができたようである。

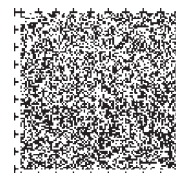
研修中はミャンマーとは異なる文化での生活に苦労している姿も見受けられたが、熱心に取り組む姿勢がみられた。

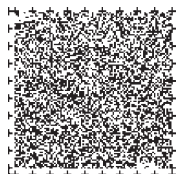
また、学院のスポーツ交流会と研修期間が重なり、他学科の学生とも交流することができ、イーさんにとって貴重な体験となったことだろう。

この研修を役立て、ミャンマーでの今後の活躍を期待したい。



学院スポーツ交流会でイーさんと小藪江教官





平成22年度 就労移行支援進路状況

就労移行支援課 就労相談室

〈就労移行支援（養成施設）卒業生・修了生の進路状況〉

平成23年2月に就労移行支援（養成施設）を卒業、修了された方の進路状況は下表のとおりです。

平成23年6月1日現在

	卒業生						修了生						合計		
	専門課程			高等課程			専門課程			高等課程					
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
治療院開業	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
治療院等勤務	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
病院等勤務	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
特養等施設勤務	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ヘルスキーパー	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	1
訪問マッサージ	1	-	1	1	-	1	2	-	2	-	-	-	4	-	4
進学・研修	4	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	5
施設入所	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	1
一般就労	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
未定	-	1	1	1	-	1	1	-	1	1	-	1	3	1	4
その他	2	1	3	-	-	-	2	1	3	1	-	1	5	2	7
合計	8	3	11	2	-	2	5	1	6	2	2	4	17	6	23

（注）未定、その他の中には就職活動中及び再受検者対象者を含む。

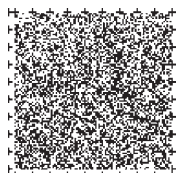
〈就労移行支援終了者の進路状況〉

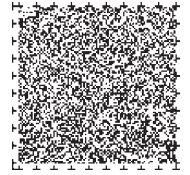
平成22年度に就労移行支援を終了された方の進路状況は下表のとおりです。

平成23年6月1日現在

就職	19名	44.3%
職場復帰	4名	9.3%
自営	1名	2.3%
就職活動継続	8名	18.6%
就労移行支援事業	1名	2.3%
就労継続支援事業A型	1名	2.3%
就労継続支援事業B型	8名	18.6%
精神障害者社会適応訓練事業	1名	2.3%
合計	43名	100%

（注）職リハ移行、自己都合退所等による終了を除く。





病院紹介シリーズ

「リハビリテーション部 言語聴覚療法部門」

言語聴覚療法部門（以下ST部門）は、病院におけるコミュニケーション障害を担当する部門です。現在ST部門の職員は、常勤7名、非常勤3名で、臨床を中心に多くの業務をこなしています。そのほか、当センター学院言語聴覚学科の教官4名、発達障害情報センターの職員1名が併任で病院の臨床業務を行なっています。ST部門では、聴覚・言語障害、摂食・嚥下障害を主な対象としていますが、対象とする具体的な疾患、障害は多様で少なくとも10種類の障害類型に分けられます。

入院患者さまは、脳血管障害や頭部外傷による、失語症、高次脳機能障害、運動障害性構音障害、摂食・嚥下障害の方が中心です。年齢層は、交通事故等の後遺症による若年の方から、脳卒中の方が多い高齢の方まで、幅広い方が対象になります。また、頸髄損傷でも摂食・嚥下障害を伴うことがあり、高位頸髄損傷で人工呼吸器依存となった場合には、ST部門が音声確保を担当します。

一方、外来の患者さまは、言語発達遅滞、口蓋裂による構音（発音）障害、発声発語器官に問題のない構音障害、脳性まひなど、お子さまの言語障害が多いのが特徴です。聴覚障害は、年齢的には新生児から高齢者まで幅が広いのですが、お子さまの聴覚障害はことばの獲得に関係するので、訓練の頻度も多く、期間も長くなる傾向があり、教育機関とも連携を取りながら対応しています。そのほか、幼児から大人まで幅広く対応を求められる障害として吃音

があります。また、音声障害は成人の方が多い障害ですが、身体的な問題を伴わないので外来で対応します。入院後の外来フォローなどをのぞくと、外来の患者さまの訓練の指示は耳鼻科から出ることがほとんどです。また外来で耳鼻科を受診される小児、成人の聴力検査についても、ST部門の職員が対応しています。

このようにST部門では、入院・外来の様々な障害類型の方にサービスを提供してきましたが、最近ではST部門の定員が削減されたために、以前よりも少ない人員で対応せざるを得ない状況となっています。少ない人数で様々な患者さまに対応できるよう、それぞれの職員が複数の障害類型を担当し、幼児から大人までの方を受け持っています。また、外部からの言語聴覚療法に関する様々な電話相談が相当数あり、これまではその多くにST部門が直接対応していました。今後はより臨床業務に専念できるよう、医事課からの協力も得て病院全体として対応できる態勢を整えているところです。

ST部門はわが国の言語聴覚療法の先駆けとして、当センター設立以来30余年の歴史があります。しかし、近年では医療保険制度も変わり言語聴覚士のいる病院も増え、利用者の方のニーズも変化しています。そのため、従来とは違うことにも取り組んでいくことが、私たちにも求められています。時代の流れに合ったサービスを提供できるよう、力を合わせて取り組んでいきたいと思ひます。

